



Title	ヨーロッパの「老い」：スーパーマーケットの虫眼鏡：西ドイツ編
Author(s)	堀井, 富士子
Citation	大阪公衆衛生. 1988, 54, p. 18-22
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/83710
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ヨーロッパの「老い」

ースーパーマーケットの虫眼鏡ー

～西ドイツ編～

大阪府寝屋川保健所長 堀井 富士子

7月6日早朝4時モーニングコールで起こされて、OS401便でウィーンから西ドイツ・フランクフルト空港へ飛んだ。

東西に自国を分割された悲劇の国。

芸術と哲学と詩情の国。

アウトバーンとビールの国。

65歳以上人口割合が15%、0～14歳の年少人口割合18.6%で1980年現在、世界第4位の高水準で老人国となっている。特に西ドイツ最大の都市西ベルリン（人口220万人）は老人人口世界最高といわれ、すでに数年前に20%を突破しているそうである。

国の苦悩は、今なお進行する高齢化と医療費の高騰による財政ひっばくである。産業国であるため何かにつけて労働者対策が優先され、老人はあとまわしにされていると老人福祉にかかわっている人達はぼやいていた。

ドイツ人は勤勉で几帳面で頑固で理屈っぽくてなんとなくとっつきにくい感じがするが、スルメのような心情を秘めていると聞いた。

かめばかむほど味の出る老人対策がやられているのでは？と、公式訪問も老人中心に集中して行われたのである。

ロマンを求めて

ヨーロッパの第一級の規模を誇るフランクフルト空港から専用バスで一路ハイデルベルグに向った。両側ほとんど人家はなく、ただ

広びろとし、緑の田園が続くアウトバーンを走ること1時間。やがて小雨にけむるオデンワルドの小山のふもと、ネッカー河畔のハイデルベルグ市に到着したのである。

中世ムードの大学や古城が一幅の絵のように、静かな美につつまれている。

ウイルヘルム・マイスターの王子ハインリッヒと少女ケティの初恋物語「アルト・ハイデルベルグ」。ゲーテの「若きウェルテルの悩み」。「老い」達はなつかしく、過ぎし時代にさかのぼっていった。

「時はうつり、人は変れど、永久にうつろわぬものはハイデルベルグの青春」といわれたそのままいつまでも保っていてほしい。



ハイデルベルグのまち

翌7日、日本は「七夕まつり」の筈——。牽牛と織女がうまく出あえるよう、どうぞ今

宵は雨にならないで——と東の空をおがむ。我々一行は日曜で訪問予定もないので「ロマンティック街道」へと気温22℃の中を快適にでかけた。

350kmの街道第一のハイライトといわれ、最も完全に中世都市の姿を残しているローテンブルグについた。中世に栄えた小都市が昔そのままの姿で、美しい街並とそれを囲む三重の城壁を完全に保存し、リーメンシュナイダーの「最後の晩さん」を飾る聖ヤコブ教会は町の中央、市役所横にあった。ちょうど時代祭りのような日で、中世そのままの服装の老若男女がはしゃいでいた。この時ばかりはロマンティックをとびこしておとぎの国へ迷いこんだ気分。古来このルートはイタリアとドイツを結ぶ重要な通商路であったようだ。

昨日、今日と過ぎし日をロマンティックにしのぶことしきりで去りがたかったが、明日からの公式訪問のため、フランクフルト市の中心にあり、ゲートの家の近く、全くドイツ風格に満ちたホテル・フランクフルト・ホーフへ旅行最終の8回目の引越をしたのである。

保健所は社会医学疫学研究所

公式訪問先の、フランクフルト市の保健局長から、州法により60万市民と周辺地方 200万人を担当し、くりひろげている公衆衛生活動を聞く。

「西ドイツには 500の保健所があり、都市と地方の保健サービスの中核となっているが、近年社会医学疫学研究所としての役割を大きくもってきた。大部分は州立保健所で、フランクフルト、ハンブルグ、西ベルリンの大都市は市立保健所。これらは独立官庁となっている。アウトバーンの排ガスがひどく、周辺の森林50%が枯れかかっている状況を調べ、排ガス対策を強く要請した結果、排ガス浄化装置をつけた車の税金の優遇対策が検討された。また、老人保健福祉対策の一つとして、

アウトバーンわきの空地进行を特別に安く借り老人のための貸し農園(60M/1年、約5,000円)にしたりとかいろいろ仕事のはばが広い。日本の保健婦のような職種は、保健福祉相談員



ローテンブルグの城壁の近く

といってGeneral Health and Social Workerの働きをし、保健と福祉を一本化して活動している。

その身分は国家ライセンスが必要で、一般看護婦、乳幼児看護婦であり社会事業実務を1年以上経験し、社会福祉学校で2年間特別の教育をうけ、国家試験に合格した者である。勤務は保健所や福祉事務所で相談指導を担当し家庭訪問も行っている。いずれも保健所の婦長的立場の人のもとに位置づけられている。市町村は、市町村看護婦を駐在させて在宅ケアを行っている。彼女たちは、家族への指導やカウンセリングも行っているが、これは保健所と密接な連けいが必要なため、保健所長の指導下に入っているとのことであった。

老人看護者の資格制

進む高齢化対策として国は老人看護者の必要を強く認識し、すでに1960年から国家養成をしている。その教育は民間事業団体に委託

するとともに、有資格者の活動費を健康保険から支払えるようにした。たとえばフランクフルトの財団法人ホームヘルプ協会（1892年設立）という 100年近い歴史ある民間の看護組織センターでも老人看護養成学校を併設している。これらヘルパーになるためには2年間この学校で教育をうけるのであるが、学課600時間以上、実習1,470時間以上修めなければならないし、その上で資格認定の国家試験をうけるのである。老人看護者の身分は専門職としてきっちり位置づけられ、このライセンスを持っていないと公認ヘルパーはもちろん老人施設の寮長、主任などにもなれない。いろいろ民間の慈善団体のボランティア活動もさかんであるが、無資格者の場合は洗濯、掃除、炊事などになっている。

資格をとったヘルパーは看護組織センターに登録し自治体、施設、病院、家庭医からの派遣要請をうけて活動するので、経営者の態度の悪いところは改善しないと来てもらえなくなる。彼女達は半日単位で仕事をしたいと希望するものが多く、家庭と両立させながら生涯にわたって活動が続けている。あるヘルパーは70歳をこし、老齢年金をもらいながら、まだ元気だからと「1ケース、週3日、2時間単位」というぐあいに契約し、90歳をこえた一人暮らしのおじいさんのところへ何年間も通っている。また自分の親のところへ通っているヘルパーもいる。いずれも有資格者の契約したヘルプなので健康保険から給料が支払われるのである。

日本でもヘルパーや福祉事務所のワーカーなどを、専門職として資格認定することが必要に思う。

老人デイ・クリニック

フランクフルト市の共済組合病院内に設置されている老人のための一連の施設を見学した。老人デイ・クリニック、病弱老人ホーム、

老人保護住宅などが連けいを密に一つのコミュニティをつくっている。フランクフルト市独自の施策で大きな成果がみられ、このころを高く評価していた。

いずれの施設も使用料は有料で各人の年金から支払われ、独立採算で運営している。年金制度が成熟しているので充分まかなえる。

施設入所の判定は、すべて医師が行っている。医療との連けいが密にとれている。同時に在宅サービスの重要性が強く認識され、施設はデイ・センター的役割も果している。これらは老人にとって住む家であり、地域参加した施設であり、地域社会の人々のための施設であるといわれていた。

病院の玄関を入ってから、およそ10分くらい奥の方へ歩いていった広い庭の一角に、老人デイ・クリニック Geriatriische Tagesklinik があった。緑につつまれた近代的2階建ての明るい建物。

病院の内科主任部長のDr.カークがここのチーフ。氏は長年にわたり老年医学を研究された第一人者で、その学問に立脚した老人施策を市が認め、思いのままにやらせてくれた第1号である。間取り、机等のサイズやちょっとした工夫、掲示板の細かい配慮、壁面はめ込み式ベット、歩行訓練場、そして広びろとした緑と花壇に飾られたガーデン……氏は次のような説明をしてくれた。

「病院で危険期を脱した老人をいつまでも寝かせておくことは、本人にとっても医療経済面からも悪いことである。だからといって退院させて家庭医へ返しても、移行期の対応が充分にとれない。もう一度、入院前の生活機能を取りもどさせるために昼間だけの入院を実施したところ、治療の経過がすばらしく向上するとともに、大きな医療費の節約にもなった」。

対象は50歳以上、要治療者で高血圧、糖尿病、心臓病やがん術後患者などで、条件としては、「寝たきり」でないことである。一部老

人痴呆のケースもあるが、重症者は痴呆専門病院の方へ送る。

ケースの送迎は赤十字社のマイクロバスが行い、毎朝7時30分～9時に来所し午後3時～3時30分に各家庭に帰す。

家族の付添は不要であるが、週1回食事等家庭生活での注意や指導をするために家族を呼ぶ。午前・午後のコーヒータ임と昼食はここで提供される。各人の病状にあわせカロリー等もすべて表示されている。

定員は60人、中心年齢層は60代、70代で80%をしめている。男対女は1対3、ケースの40%はこの病院入院患者と病弱老人ホームからで、残り60%は家庭医から送られてきている。

「デイ・クリニックは総合病院と併設しなければ緊急時対応や医療費のコストベネフィットにつながらないと思う。財政的メリットがあれば行政はのってくる。我々はそれをやってみせることである」と自信に満ちて語っておられた。ここでの成績がよいので、今第2号の建設検討中とのことである。

職員は、所長（老年医学医師）1名、内科医師1名、老人看護婦6名、保健福祉指導員2名、栄養士1名、言語療法士1名、OT2名、PT2名の計16名である。

老人ホーム

老人ホームAltem und Pflegenheimはデイ・クリニックから5分ほどはなれたところがあり、11階建ての明るく清潔感にあふれた立派な建物だった。西ドイツの老人ホームは、全国一律に条例により施設の1/3は病弱老人の看護区域（日本の特養）とし、2/3を老人の居住区域（日本の養護）と混在させなければならない。しかし現在高齢化の進行と重症化が進み看護領域該当老人が増加し待機の状況となり条例改正を検討中であるとか――。

ここでも軽い痴呆はまじっているが重症に

なると専門病院の方へまわしているようだ。病弱老人看護領域のフロア4Fは同じくDr. カークがかかわっており自ら案内して下さる。2人部屋と3人部屋からなり「ねたきり」の人が半分位。ケースは主として病院の入院患者で、緊急時を脱したあと家での介護者がなく、一人で独立生活のできない人達である。

コバルト・ブルーの大きな花柄のドレスに身をつつみ、ブルーのパンプス、ハンドバックを手にしてソファに腰かけていた上品な御婦人を我々に紹介してくださった。彼女は今年96歳になったそうである。



老人ホーム看護区域で

この入所者の男女比率はやはり1対3。ここでも女性上位である。食堂、エレベーター、庭園など、日本のホテルのようであった。

老人保護住宅

老人保護住宅を最後に見学した。ここはひとりで歩け独立生活のできる病弱な単身老人または老人夫婦のための老人マンションで、前述の施設の近くに建てられている。14階建て、ベランダには花が飾られ美しくそして明るい色の近代的マンションである。

病院、デイ・クリニック、老人ホーム等が同じ構内にあり、身体状況にみあった施設を

医師の判断で適切に利用することができることと、マンションの1階に看護援助のための機能が常設されていて、各室と緊急時の対応や日常の簡単な健康相談ができるようになっていた点が、一般マンションとの違いである。

各室50～60㎡のワンルームマンションでキッチン、トイレ、バスルームには、手すり、ふみ台など安全のための装置があり、ベットのコーナーの壁面には1Fの看護援助室へのナースコール装置がベッドに臥床した状態で使用できるようにつけられていた。

室内は使いなれた家具、ジュウタンを持ち込み、長年の思い出につながる生活がくりひろげられるよう配慮されている。その他このビル内には入居者同志の交流のため、談話室、図書室、娯楽室や多目的ルームがあり、スーパー等のショッピングもあっていたりつくせりである。家賃1ヵ月400M(3万円位)で年金で支払える。

しかし、ここでも老人をねらった私企業的老人福祉産業がさかんになっており、すでに1968年には、措置施設でもないもうけ主義の老人ホーム、老人住宅が乱立しだして社会問題となり「有料老人ホーム、老人住宅の最低基準に関する条例」をつくっている。その内容をみると、人権の認められる一人当たりの部屋の広さ、手すり、照明など安全設備、キッチン、トイレ、バスルーム等衛生設備からナースコール、インターホン、冷暖房の完備を決めている。また、職員についてもきびしくその資格・定数を、またケース記録から出納簿にいたる書類の整備と保存、報告義務、また監督官庁の立入り検査等徹底に入り細にわたっている。日本はだいじょうぶなのかな、と心細くなる。

スーパーマーケットの虫眼鏡

老人マンション1階の看護援助室主任のミラーさんは(財)フランクフルト・ホームヘルプ

協会に所属し、そこからの派遣である。前述の老人看護者としての資格保持者であるから、給料は健康保険から支払われている。彼女はユーゴスラビアの生れ、「国の年老いた両親は家族とともにくらしている。私の国にくらべてドイツ人の家族はとても冷たいと思う」と言っていた。

今西ドイツでは、この国で10年以上働いた他国籍の老人に対し、各人の生れた国へ引揚げばなら、引揚げ援助金を出すときかにPRしている。

たしかに昼間の町の中は老人だらけである。スーパーマーケットなどは上からゴム紐で虫眼鏡をぶら下げて、客が買物に困らないようにしているところがふえてきたということである。なるほどよく値札をみて、説明を読んで十分に得心して買物をしてもらうことは、ドイツの国民性からいって大切なサービスに違いない。

時間の都合でスーパーに行けずに帰国したのが残念でならない。物質的豊かさの日々の生活の中で、すべての老人に生きることの充実感と心のやすらぎを持たせるために保健所は何ができるのか。スーパーマーケットの虫眼鏡で覗けるものなら覗いてみたかった。

ヨーロッパで見た「老い」
美しくカラフルに自分を創造し
満足するまで 己れを見つめ
せいっぱい 背すじをのぼして歩いていた

生まれた国は違っていても
誰でもが 何時の日か やがて一人
たまらない孤独の中で生き
凍てつく 冬の雪を知る

孤独との戦い「老い」
スーパーマーケットの虫眼鏡
おまえは毎日それを見る

《完》